

冬から春、自然を感じる 江戸川双葉幼稚園（東京都江戸川区）

真冬のバッタ

「せんせい、来て！」「見て、バッタだよ！」「生きてるんだ！」
興奮気味に、子どもたちが叫ぶ。声も、かなり上ずっている。「ねえ、早く！」
こんな真冬にバッタだなんて！と思った。呼びにきたHには、そんな大人の心が読み取れたらしく、「生きてるんだよ！」と、重ねて言う。案内されて行ってみると、そこは、非常階段の下の壁と、積み木に使っている角材とで囲われた狭い一角。

「ほら、あの板の上」とHが指差すところを見ると、確かに茶色のバッタらしいものが！「生きてるんだ！」「ほら、動いた！」第一発見者のHは、「積み木を使おうと思って、取ったら、そこにバッタがいたんだ」と、「びっくりした」いきさつを興奮して話す。「積み木は取りたいけれど、もし崩れたら、コイツ死んじゃうし...」それで、とても心配になって、先生を呼んだのだ。「だってさ、ちょっと弱ってる感じだったから、そっとしたほうがいいか、と思って」「先生、死んで、って思ったでしょう？」

「あ、葉っぱ食べた！」「こんな日の当たらない場所じゃ、寒いよね」「でも、最初から、自分でそこにいたんだから、そのままにした方がいいんじゃない？」と、議論百出であった。好奇心旺盛な子どもたちは、伝え聞いてどんどん集まってくる。

そうこうするうちに、バッタが、Fの差し出していた板切れの方に移ってきた。

ああ、本当に生きている、と私は改めて実感した。一体、どうするんだろう？みんな、一瞬息を飲む。

Fは、その板を動かさないように、そろりそろりと、日向の方へと運ぶ。バッタも、じっと動かない。すぐ南側の植え込みのところに、その板を置くと、バッタは、音も立てず、スッと落ち葉の上に降り、間もなくもぐって行ってしまった。この間、みんな息を殺し、じっと見入っていて、誰も一言も発しない。バッタが、枯葉の陰に入って見えなくなった途端、ふーっと、誰からともなく大きな吐息。いのちの不思議に圧倒され、時の経つのを忘れていた。



(考察)

それにしても、虫のいない時期に見つけた珍しいバッタであったはずなのに、子どもたちのこの慎重な、そして丁寧な虫への対応には、感服しないではいられない。

多分、いようとは思ってもいなかったところでの思いがけない虫との遭遇。普段なら、決して目と鼻の先で、バッタがジッとしていてくれることはなかった。「おじいさんの虫かなあ？」「どこか、具合が悪いのかなあ？」「寒いから？」子どもたちは、考え、話し合い、悩み、そして、恐れをも感じながら、教師を呼んだのだった。“本来のバッタの姿ではないもの”“何とかしてやりたい”“元気に頑張れよ”と。

子どもたちが、バッタの身になり、バッタのいのちをいとおしく思い、何とか助けてやりたいという祈りの思いがその場を包み、年少から年長までの大きい子も小さい子もみんなに共有されていた。その厳かな空気に圧倒される思いだった。いつもなら一番腕白な子さえ、決して棒で突くことも、石を投げることも、そんなことは思いもよらない雰囲気こそ包んでいた。

「科学する心」とは、まさにこれではないか。驚き、感動し、伝えないではいられない思いに駆られ、伝え合い、さらに興味が深まり、好奇心が刺激され、感動しあう仲間が集まり、その共感の輪が大きく波紋を描いて広がってゆく。いわゆる理料的な興味・関心だけではない、もっともっと、大きく広がる、豊かな感性・知性・思いやり・想像力・思考力・忍耐力・洞察力・生命への畏敬...。そして、何よりも真実を見つめようとする謙虚で真摯な心と真っ直ぐな好奇心。

そんな心の育ちに、子どもたちと共に生きる喜びと醍醐味を感じ、さらに明日への期待感が心のうちに溢れてくるのをびりびりと感じた。

虫たちの隠れ家、発見！

冬のバッタの興奮もさめやらぬ晴れた一日。風もなく、とても穏やかで、青空が広がる。明日は、雨という予報だったので、急遽、江戸川へ行くことになった。

広い原っぱに散った子どもたちの一群が、あちらこちらと虫探しに走る。枯れ草の間、植え込みなどなど。そのうち、植え込みの縁取りにしてある丸太の間に、ダンゴムシを見つけたT。「ダンゴムシだ！」「来て、見て」と手にダンゴムシを乗せて、触れ回っている。近づいて見ると、小さな赤ちゃんダンゴムシもいて、冬越しは大きいものばかりかと思っていた私たちは、ちょっとびっくりであった。「ここだよ」

と案内され、覗き込むと、子どもたちのほじくった部分に、まだ丸くなっているダンゴムシがぎっしりいた。が、この好奇心旺盛な彼らが、それ以上には採らず、ちょっと手にしてから、また、穴に戻した。バツタに続いて、嬉しい虫の隠れ家の発見だった。

「やっぱね、こういうところにいるんだ」と自信満々に話している。これまでの経験からどんなところにと洞察し、試行錯誤しながらの発見だったのだろう。

(考察)

この「やっぱね」の一言に痛く感動した。と同時に“なるほど”と深く納得した一言でもあった。子どもたちは、やはり、あの感動的・衝撃的な冬のバツタの一件で多くを学び、洞察し、仮説を立て、探索していたのだった。そして、その輪は年下の女の子にまで広がっていった。

決して、ダンゴムシを見つけて捕まえようという意図で探したのではなく、試し、発見し、確かめ、納得したかったのだろう。それができれば、もう十分満足し、後は、また元に戻し、小さな虫の命を大切にいとおしみ、生命に対して畏敬の念を抱いていたのだ。

とても豊かな人格形成がなされている、と感動し、教師冥利に尽きる思いだった。実は、“僕が、見つけたんだから、僕のだ”などと言い出すのではないかと思ってしまった身としては、肩すかしを食った一件だった。

虫が呼ぶ、花が呼ぶ、生命の連環する園庭に

「アリだ、アリだ！」小さい組の子どもたちが、桃の木のところ集まっている。まだ若木の初めての花。その木にアリが登って行く。「アブラムシ、いると思うよ」の年長のFの言葉に、子どもたちは、枝々を念入りに見つめる。「テントウは？」

アリンこ探しをしていた小さい子たちも、アリのきっかけにアブラムシやテントウムシにまで世界が広がっていった。「テントウは？」「いた、いた」「テントウの幼虫だ！」

(考察)

年長児の一言で、アリの追っていた年少の子どもたちがテントウムシの幼虫に出会い「すごーい」とびっくりしたり、大興奮。年長は、これまでの園生活での様々な虫たちの生態から、その食物連鎖で、アリ アブラムシ テントウムシというつながりを知っていて、「アリが木を上っているということは、きっとアブラムシがいて、テントウムシもいるかも知れない」と想像し推察したのだが、そうした兄貴分の子どもたちと一緒に行動することで、そのような知識が共有されてゆくのだろう。異年齢の子ども集団での、学びあい、知識の伝授、伝え合いが、不思議に思う心と共に期待通りに育まれていることを確認できた。

このような自然界のバランスがとれて、うまく連環する園庭を望んで計画配慮してきたつもりではあったが、自然は思い通りになるものではない。予想は見事に裏切られたり、初めから難問を抱えることも起こる。やっと、根づいてきた芝生であるが、大きな懸案を抱えることとなった。

みどころ

真冬にバツタを見つけて驚き、「どうしたらいいのか？」と思いやる姿、ダンゴムシの赤ちゃんを見つけて「やっぱね、こういうところにいるんだ！」と探す場所を考えて見つけれられたことで予想通りだったと納得し、自信満々の姿、「アリだ」「アブラムシいると思うよ」「テントウムシは？」とアリを見つけたことから推察して意欲的に探し、テントウムシの幼虫を見つけ出す姿。どの姿も、自然を身近に感じ、親しんできていることがよく分かります。こうして自然にかかわる年長児の姿や会話のある場で一緒に活動していることで、年少児たちも同じように、出会った虫に心を動かす、自然を感じていくことでしょう。